

ヨーロッパ知識人エガート博士の見た日本

野 崎 弘

エガート博士略歴

John Eggert は 1891 年 8 月 1 日 Berlin に生まれる。国籍ドイツ人、最近になってスイス市民権をうる。1921 年から 1928 年までベルリン大学教授。この間に有名な物理化学の教科書 *Lehrbuch der physikalischen Chemie* をあらわす。この書は 1960 年に 8 版が出て、英語・仏語・イタリア語・スペイン語・ロシア語に訳され、各国で愛用されている。研究としては光化学に関するものが多い。この研究から写真会社にも関係するに至った。1928 年から 1945 年までドイツ Wolfen の Agfa 社で研究、Agfa 中央研究所を創設指導する。第 2 次大戦後 1946 年まで München の工科大学に勤務、1946 年秋 E. Rüst 教授の後任としてスイス Zürich にある国立工科大学教授として今日に至っている。名刺には次のように書かれている。

Dr. Dr. ing. e.h. John Eggert

O. Professor An der Eidg. Techn. Hochschule, Zürich.

日本滞りは次のような日程であった。1960 年 9 月 22 日 羽田到着、9 月 23 日 NHK 訪問、9 月 24 日 東大・写真短大・オリエンタル訪問、9 月 25 日 日光見物、9 月 26 日 東京講演会、9 月 27 日 小西六日野工場・研究所訪問、9 月 28 日 防衛大学・鎌倉、9 月 29 日 富士フィルム足柄工場・研究所見学、9 月 30 日 関西旅行、10 月 1 日 京都市内・大阪城見学、10 月 2 日 奈良見物、古梅園製墨工場見学、法隆寺・中宮寺を見る。10 月 3 日 西陣のゆうぜん染、東映撮影所見物、10 月 4 日 京都講演会、10 月 5 日 三菱製紙京都工場訪問、桂離宮見学、10 月 6 日 東京、10 月 7 日 ソニー訪問、歌舞伎見物、10 月 8 日 離日、フィリピンマニラに向け出発。以上のようなスケジュールであった。

はじめに

スイス連邦工科大学教授エガート博士といえば、いまから 35 年前の 1926 年に博士がベルリン大学教授をしていたとき書かれた教科書「物理化学」の著者として化学関係者にはひろく知られている人である。今年 70 才日本ではこの年では引退する人が多いが、昨秋秋実にかくシヤク（鑿鑿）として日本学会の招きでやって来た。博士は Agfa 社の技師長をしたこともあり、現在写真科学といういくぶん俗な面にたずさわっている研究者であるが、教養識見の高さにおいては欧米を通じ第一級の知識人であることにはちがいない。昨秋の日本旅行記をかの地の物理雑誌にのせられたのを筆者らに今回よせられた。ヨーロッパ知識人のみた日本ということで少なからず興味があるので著者のご好意を得てここに紹介することにした。日本では東京と京都およびそれらの周辺が博士の主たる滞在と訪問先である。学者である博士の感想文はさすがわかりにくい所はない。博士の意図を正確に伝えるためには全文をほぼ直訳とした。

日本見聞記

1960 年 9 月 21 日の昼下がりの午後 1 時わたくしはジェット機でパリから日本に向け飛び立ったのである。3 時間にしてアイスランドの上空を通過した。探険家 Alfred Wegenes を失ったグリーンランドの氷上ではす

でに 3 時間の時差ができた。ここでは太陽に面してまだ午後 2 時であった。出発より 6 時間にして北緯 80 度の氷海上 7,000m の上空にあったが、そのときの土地時刻は出発と同じ午後 1 時であった。仏語と日本語で印刷され、日付のついたメニューで結構な夕食がふるまわれた。そのときスピーカーは外気温度零下 48°C を伝えた。アルプス程度の高峰をもつアラスカのアンカレジは日本に到着するまでのただ一つの着陸地である。ここには出発より 9 時間半の飛行で到着した。時刻は午前 11 時である。この時間はほんとうはわれわれにとっては就寝する時間なのである。乗務員の交替、給油が行なわれた。再びアリウシャン列島に沿って太平洋 10,000 m 高度の飛行を続けた。日付変更線を通過した。飛行機の窓は光を通さぬ厚い幕をおろしていたが、外には太陽はさんさんとかがやいていた。外を一瞥すると、上空は白くかすみ地平線は帯のように横たわり、大洋のおもては鋼鉄青色に黒く、洋中深く入って灰青色に変わってゆくのが見えた。アンカレジより 7 時間半にして午後 3 時東京について。その間もう一度印刷して日付のついたカルテに従って、再び妙なる響応が行なわれた。かくして 18 時間の間一度も太陽の没することなき空の旅となったのである。

飛行場が無数の旗でかざられ、数えきれない人の波であった。あとで聞くとところによるとちょうど同時刻に日本の皇太子夫妻が米国へ向け出発されたのであった。わ



Eggert 氏 (右より三人目) と Zünd 氏 (右より二人目) 日本到着 (1960.9.22)

たくしと同行の Dr. Zündとは東大・防衛大学・工業界の合計7人の出迎えをうけた。この人々はわれわれの日本訪問をお世話下さった人達である。

日本滞在は2週間半であったが、その間毎日が強烈な刺激的体験の連続であった。われわれは寺・神社・旧跡に案内された。そこには必ず優雅なる庭園・観賞用植物・池・苔があった。数百年にわたる古い工業やら、できたばかりの工業までみせてくれた。乗物は鉄道で国電・ケーブルカー・豪華特急車に乗った。または自動車で郊外に連れてゆかれた。ヨーロッパ風または日本式の接待や饗応をうけた。そのとき多くの場合、殷懃で、愛嬌があり、好意に満ちて、華麗に着飾った芸妓がはんべっていた。われわれはしばしばホテルの日本室にとまった。この日本部屋には生活用具はない。ただわずかの絵画がかかっているだけである。また優雅な花瓶が置かれてあり、花や木の枝が盛られている。寝具は床である畳の上にしかれ好適である。どの部屋もまた神をまつた部屋もすべて靴下だけで入るのである。食事はすべて箸で食べる。焼いた魚・生の魚もある。煮たり、天火で焼いたカニ・伊勢エビ・鶏卵・鳥料理・茸料理・生野菜料理がある。この生野菜料理はアメリカの影響なのであろうか。鯉料理・ジンギスカン焼肉料理もあった。たいていの場合、長時間の食事の完全な終わりになってはじめて米飯が出されるこれは閉口であった。ライスのとには果物がつついて出されるだけである。アルコール飲料はどうかという米から作った酒がある。これは温めて10ccくらいの容器(盃)でのむ。アルコール分は30%位と思う。そのほかはビールである。ビールは非公式、公式の別なく使われる。お祭や結婚式のような場合にも使われる。訪問をすると必ず饗応者は日本茶を出す。これは淡緑色希薄の熱いお茶である。なんの味もない。これとは別にコロイド質葉緑素の浸出液がある。これは大きな焼物の器に入れて出される。これを両手でおさえてのむのである。苦い味がする。一定の儀式に従って、これをするのである。

最も気持のよい、特に暑い日にそうなのであるが、特筆したい一事がある。それは食事の前およびあとに、ホテル・レストラン・私的な会合で、しめって熱い固く巻いたタオルを盆の上ののせて渡される。そのむしたタオルで顔をふき、同時に手をふいてきれいにする。これはわれわれの地域でも真似するに値する習慣と思われる。

日本では西欧に比べ多様の異なった生活様式や習慣が行なわれている。たとえば文字を考えただけでもそうである。ところがそれでもなおかつヨーロッパ風様式への強い同化作用が起こっており、このため西と東の興味ある両存性があらわれている。対になって両存するいくつかの例を示そう。ジェット機で日本人スチュワーデスははじめパリスタイルであった。それが飛行時間が経過するにつれて、彼女は服装を Kimono や Obi に変えた。メモに字を書くのに日本人インテリは英語と仏語をラテン文字で書き、これにまじえて自国語を日本語でしかも水平に横がきしている。名刺はたいていの人が自国の文字とラテン文字とで一緒に書いている。同様に、事務所などでこみ入った計算を驚くべきほど正確をもって行なうことのできる簡単な算盤というものがある。これに対して最新式のレジスター機や計算機もともに使われている。またラテン文字のタイプライターとともに無慮数百個の漢字を並べたそもそも植字印刷機であるところの日本語のタイプライターの存在を見るに至っては、また何かおきわんやである。

また一方、別な例を示そう。東京の歌舞伎劇場では主として古典舞踊と古典戯曲が上演される。そのときの役者は男だけでこれは女役もつとめる。この貴重な芸術的一幕をわたくしに見せようとして、わたくしを午後代表的な劇場に連れて行った。そこでわれわれは大きな驚きを見出したのである。シラズドベルジュラックが演じられていた。洗練されたスタイル、正確に覚えこまれた仕草、衣裳の着付、フランスシャンソンによる音楽的表現そしてヨーロッパ風に化粧をこらし、髪形をこらして、男女役者がしかも同時に日本語でせりふをはなっていたことには驚き入った次第である。

日本映画のスタイルについてはわたくしは語るを要しない。われわれはヨーロッパで輸入されたのを見てそれらを知っているからである。映画スタジオの京都にあるものは、ハリウッドと同様のように見うけられた。東京の新しいテレビ放送局は、数えきれないばかりの撮影室・管理室・調整室・実験室があり、これらはヨーロッパまたはアメリカのこれに相当する設備に比べ優るとも劣らぬものがある。これは同時に、テレビ受像機の製造の広大な工場が存在することを意味するのである。これらの大工場はいずれも10年とたたないもので、しかも内需にも外需にも応じているのである。このテレビ工業と同じレベル、同じ若さをもつ工業がある。それは音と画



Eggert 氏および Zünd 氏ソニー訪問 (1960.10.7)

像に関係するものである。すなわちトランジスタによるポータブルラジオ工業、磁気テープレコーダ、VTR などの製造工業である。これらはいずれも注目に値する輸出計画のわくの中にのせられている。1948年にトランジスタはUSAに発見された。ところがそのUSAに日本は今日輸出している。日本人は模倣の親玉であるとの言葉をしばしば耳にしたことがある。たしかにわたくしはこのような模倣性について二三の例を知っている。しかしながら残念ではあるが次のことを認めざるを得ない。すなわちかの国日本のメーカーがその手本となるものを非常にはやく凌駕してしまうということである。少なくともヨーロッパ製品についてはそうである。たとえばその例は 35 mm の写真カメラである。これらヨーロッパ製品ははじめ精密機械のまたは光学的に世界第一級であったものが、日本製品にその地位をとって代わられてしまった。通常商品として出回っているカラーフィルムでも（まだこれは輸出されていないが）そうである。これはたとえばアマチュア用のものでもまた商業上の映画用のものでも、また街で売っている名所旧跡などのスライド写真についても同じことがいえるのである。

参観した工場の従業員についてその人的要素の立場から注目を感じたものがある。それは指導的立場にある人々・物理学者・化学者・技術者・実業家などの平均年齢が低いことである。高齢者はわたくしはほんの個別的に知っているだけである。年配者は比較的早くから恩給による引退生活に入るように思われる。

日本工業の生産力が旺盛であるも一つの理由は、民族性に「分に甘んじる性質」があるためだとされる。この「足ることを知る性質」は欧米に比較して低い賃金制度を可能ならしめている。このことは大学教授についてもあてはまる。かれらのうちで自分の車というものを与えられているものは極めてまれである。かくしてわれわれは多くの場合豪華にして恐しく安いタクシーで乗り回さ

れた。工業界でさえこのタクシーを利用しているのである。

高き工業水準は實際上過去 15 年間に生まれ、なしとげたものである。かくして古きものと新しき世界の共存、すなわち聖なる神社や古代遺跡とともに目もまばゆいネオンサイン、立ち並ぶ近代高層建築物、怪物的百貨店とがともにわれわれに身近な存在としてあらわれているのである。

古きものの例をも一つだけあげよう。これは支那の水彩絵具である墨およびその筆の製造工業で、京都の近くの奈良で行なわれている。古代の地下納骨堂のような小さな仕切部屋で数百個のろうそく様焔がもえている。この焔は一定割合の混合油が供給されている。焔が冷たい板にふれてそこに極めて細いすずを析出する。その板の表面から時々すずをかきとって、これを濃い膠溶液に手と足で几帳面に掘り込む。こうしてすずが全体に均等にまじるようにする。硬くなったペーストを手でそれぞれの形に成形する。全体を暖い灰の中においてそこで乾燥する。固い小さい墨はこじんまりした木箱に入れられ世界中に出回っている。たいていの墨は毛筆と一緒にである。毛筆工業もまた同時に奈良で手工業で作られている。これらは古き伝統による家内工業として続いているものである。多種多様の毛の種類・馬・豚・兎・テン・アナグマ、その他のものを用い、これらをいろいろの割合に混じて揃えて、束ねて、しばってとりつけ、端を切り、乾燥して（再度灰をつけてかわかす）、もう一度毛をそろえて、にかわにつけ、しばって柄をつける。手で題銘をほってかき込み、次に筆の先が損傷をうけないように注意深く包装する。微細な筆の先は毛筆家、芸術家が極微の筆致の妙を発揮させるに大切なのである。墨と筆は結局日本の漆器業者によって趣味豊かな墨塗りの箱におさめられる。その箱の中には小さい水入れと墨をこすするための硯とが一緒にしまいこまれるのである。

以上のようにしてわれわれは 18 日間新しき世界を見聞した。新しきものとは何かといえば、それはそこに見出した人間であり、かれらの習慣・言語・文字である。なかでも、物やさしく温和にして小柄な人間どもが、最も短時間にして西欧の知識と技術をわがものとし、たゆまざる努力と高度の知力によって、おさえきれないあらしの突進のごとく、人類の財宝福祉の開拓に貢献していることは何にも増して驚異とするところである。

J. Eggert

(1961年5月23日受理)